「素粒子から宇宙へ
ー自然の深さを求めてー」

早川幸男 著
名古屋大学出版会，352頁，定価2,266円
発行日 '94.2.5.

今年1月29日，名古屋大学シンポジオンでこの遺稿集の出版記念会も兼ねた「早川先生を偲ぶ会」があった．この会場は早川先生が学長として建設に尽力したものだそうだ．「思い出を語る会」では西村　純，山口嘉夫，菊池　健，田中靖郎，大貫義郎，加藤隆子，早川尚男の各氏の話があり，パーテイでは小田　稔，古在由秀氏などの他，先生が学んだ武蔵高校の同窓生，早川夫人らの挨拶があった．山口氏が語られた先生が大学を出て大阪市大に赴任するあたりまでの若いときの話を聞くにつけ，確かにこの様な大人物はめったにいないなと納得がいった．この本のある雑誌での紹介で先生は「男の美学を貫いた」人間だという文章があったが正に同感である．

この遺稿集に載っている文章は1952年から1992年に印刷されたものまで40年間にわたっている．欧米で2年間研究体験を書いた1952年の「暗い谷間の研究者」は時代を感じさせるものである．当時は全く少数であった欧米での研究経験者が何故意気揚々と明るい面を描かず，こういう書き方をしたのか私には不思議に思える．

この文章と並んで長い大作が「現代科学を切り開く道」(1964年)であるが，ここではダイナミックな展開をみせた60年代科学の躍動を描いている．当時の先生を「日本語も話すガイジン」のように憧憬の眼で見ていた私にとっても時代を思い起こさせる．

最初に載っている「学界の権威と学問の権威」という文章の辛らつさは相当のものである．これを書いた当時は先生がまだ36，7才という計算になることも考え合わせると感慨もひとしおである．これらの文章も含めた初期の文章を読むにつけ，現在の同世代の研究者の「成人度」と比較して考え込んでしまう．

掲載されてるのがこの種の文章の全てではないので統計的に有意かどうか分からないが，70年代のは少なく，80年代になると湯川秀樹，朝永振一郎追悼，戦後の素粒子論歴史，学長，などでこうした文章もまた多くなる．

70年代は観測的研究や研究体制のいろいろの場で引っ張り出されたりしたので少ないものと推察する．この時期の一つに「生殺しにされている物理学」(177年)というどぎつい標題のがある．そこに先生の物理観がやや舌足らずに書いてあるが，こういう話をもっと突っ込んで聞きたかったと思う．

全体の印象としては先生にとって如何に「素粒子から宇宙へ」の距離が小さかったか，ということである．現実には先生の研究は60年代からは殆ど宇宙物理である．しかし，この本から受ける印象はこれとは大分違ったものだろう．体制として整った宇宙物理の中で成長してきた天文月報の多くの若い読者にとってはやや意外なことかも知れない．

本の編集に一言注文を述べると各文章の始めに発表年代を入れて欲しかったと思う．編纂は年代順ではなく内容でなされているので，若干戸惑うところがある．何しろ四十年にわたっているわけだからその時代を念頭におかないと伝わらないこともある．各文章の後には年代が記載されているが読み終わってから，「ああそうか」ということにもなる．年代順に掲載した文章を並べた表が最後につけてあれば面白かったと思う．

この本には序として西村氏の，解説として小田氏の文章が載っている．また折込のしおりがあって，先生の思い出を武谷三男，西島和彦，佐藤文隆，飯島宗一（元名大学長）の4氏が書いている．

佐藤文隆（京大理）